

## 礼拝のしおり (2023年2月号)

～主の御前に一つにされて～

「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。

(テモテへの手紙一 1章 15～16節)

主の聖名を讃美いたします。今年も1か月が過ぎて、時の経つ早さを改めて実感いたします。

教会暦において、やがて受難節(レント)を迎えます。受難節は、復活日(イースター)の前の、日曜日を除く

40日間です。復活日(イースター)は、春分の日の後の満月の直後の日曜日と定められており、毎年移動するため、受難節の始まる日も年によって異なります。今年も、2月22日から4月8日までが受難節となり、4月9日に復活日(イースター)の礼拝を捧げることとなります。

受難節は、主イエス・キリストが私たちのために十字架へと向かい、苦しみを受けられ、死んでくださった、そのことを覚える時です。受難節においては、教派によって、断食に類するようなことを特別に行う習慣があったりもするようです。私がかつて出会ったあるキリスト者の方は、毎年受難節には、断食とまでは行かなくても、自分が好きな食べ物を一つ決めて、それを決して食べないということをしておられました。また別の方は、そのような食べ物に関わるのではなく、受難節だけは、必ず教会の祈祷会に出席し、共に祈ることを大切にしておられました。

ただ、特別な何かをしようと思いついても、受難節という1か月半ほどの期間の中では、どうしても挫折してしまう。そういう苦い思いだけを味わうようなこともあるかもしれません。きっと大切なことは、特別な何かをするにしても、そうでなかったとしても、受難節の意味に思いを馳せ、私たちが主イエス・キリストの十字架に思いを集めて過ごすことなのでしょう。もちろん、そのことは受難節という時を超えて、私たちがいつも覚えるべきことです。そのことを考えれば、受難節とは、主イエス・キリストが十字架に死んでくださった、そのことがこの自分のためであることをしっかりと受けとめ直す時なのだと思います。

使徒パウロは、自らのことを「罪人の中で最たる者」と公に述べてためらいませんでした。しかし、それは自分をひどく蔑むようにして見ていたということとは違います。パウロが、「わたしは、罪人の中で最たる者です」と語った後、すぐにそのような自分がキリスト・イエスを通して受けた憐れみを語るからです。「しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした」。

キリスト教会は、罪人の集まりです。そのことを忘れることはできません。しかし、罪人である私たちのために、救い主は十字架において尊い血潮を流し、死んでくださった。そのことがほかならぬこの自分のためであることを知らされ、その限りなく深い憐れみを受けた罪人たちの集まりとして、教会は立ち続けます。

その意味で、パウロがここで語る言葉は、キリスト教会に生きるすべての者たちに当てはまる言葉とも言ってよいだろうと思います。「わたしは、その罪人の中で最たる者です。しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした」。私たちも、キリストを通して憐れみを受けた罪人として、多くの人々の手本となって神さまに用いだけますように。



今年も白梅が咲き始めました。

☆2月19日～3月12日の主日礼拝、その他について（お読みください）

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21	聖歌隊奉唱 (讃美歌 21)
2月19日(日)	コヘレトの言葉 12章 8～14節 ペトロの手紙一 1章 17～21節 「むなしい生活からの救い」	詩編 32 編	2, 149, 358, 28	531
2月26日(日)	イザヤ書 40章 6～11節 ペトロの手紙一 1章 22～25節 「草は枯れ、花は散れども」	詩編 143 編	352, 299, 452, 29	360
3月5日(日)	詩編 118 編 22～29節 ペトロの手紙一 2章 1～10節 「救いの味わい」	詩編 34 編	1, 99, 81, 26	127
3月12日(日)	エステル記 4章 1～17節 マルコによる福音書 14章 3～9節 「できるかぎりのこと」高橋幸神学生	詩編 1 編	3, 515, 512, 24	516

2月19日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況に大きな変化がある場合には、以下の記載とは変わってくる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするようにいたします。

#### ◎主日礼拝について

主日の礼拝については現在、1回の礼拝(午前10時30分開始)に戻っています。どうぞ開始時間について、お間違えのないようご出席ください。

なお、手指の消毒、ディスタンスをとっての着席、マスクの着用等の感染対策は続けていますが、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第1日曜日の礼拝においては、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。

毎主日の礼拝のライブ配信(礼拝の生中継)も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください(TEL 03-3333-2465)。

また、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

#### ◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日午前9時から行っています。礼拝堂で礼拝を捧げ、9時20分より分級を行います。幼小科の分級は礼拝後、1階大集会室において、また同じ時間帯に父母分級が1階小会室において行われます。

中高科は、毎日曜日午前9時30分より、2階会議室において行っています。

#### ◎オンライン祈祷会について

Zoomというアプリを用いてのオンライン祈祷会を、毎月1回(第1日曜日の午後5時より)行っています。

#### ◎その他

求道者会、壮年会例会、バイブル・クラス等、さまざまな集会在少しずつ再開されています。どうぞご参加ください。

**「試練に悩むときも」（ペトロの手紙一 1章6～9節） 牧師 七條真明**

新約聖書に収められた書簡の一つであるペトロの手紙一は、キリスト教会の歩みが始まりました紀元1世紀、教会の歩みをその中心において担うことになった使徒たちの一人ペトロから、小アジアと呼ばれる地域に生きていた教会の人々へ書き送られた手紙です。しかし、この手紙の受け取り手である当時の小アジアの教会の人々について、具体的なイメージをもって思い浮かべることが、私たちにはなかなか難しいかもしれません。

時代的な状況としては、ローマ帝国によるキリスト教会への迫害が起こっていた時代、あるいは他の地域で迫害が起こる中、小アジアの教会の人々にも迫害が迫って来ていた、そういう状況を、この手紙の背景として考えることができます。

ある人は、「迫害」と聞いて、紀元1世紀のキリスト教会の人々の姿を、自分がかつて映画で見たり、あるいは小説、文学を通して知っているイメージにおいて、心のうちに思い描くかもしれません。また、時代や場所は違っても、私たちの生きる日本において、キリシタンと呼ばれる人たちが、迫害の中で、殉教の死と呼ぶべき死を死んでいった。そのような信仰の姿を、共通のものとして思い浮かべられるかもしれません。

ただ、もしかすると、そのようなイメージを抱く時には、同時に、一つの問いとも言える思いが、私たちの心に伴っているのではないのでしょうか。教会に連なるこの私も、同じような状況に置かれたとして、そういった人々と同じ姿で、信仰の歩みを貫けるのだろうか。いや、とてもそのような自分とは言えない。迫害の中で、殉教の死を引き受けて死んだような信仰者たちは、自分とは違う特別な人々としか思えない。きっとそうだ。そう思って、紀元1世紀、ローマ帝国による迫害の中で生きたキリスト者たち、あるいは時代や場所を超えて、キリスト教会の歩みの中で生きた信仰の先輩の姿を、今を生きる私たち、この自分とは遠くかけ離れた人たちとして捉える。そういうことがあるのではないかと思うのです。

そして、紀元1世紀、小アジアの教会に送られた手紙に書かれたペトロの言葉によっても、もしかすると、私たちの中にあるそのような思いを、さらに大きくさせられるように感じる場所があるかもしれません。「それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいてのことです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称赞と光栄と誉れとをもたらすのです」（6～7節）。

今しばらくの間のいろいろな試練ということに、ペトロは触れます。ここで語られる「いろいろな試練」の中に、迫害の状況、それによってもたらされる苦難が含まれていることは確かでしょう。そのような状況に置かれる中で、「あなたがたは、心から喜んでいて」とペトロによって言い表される人々。やはり私たちとは違う。そう考えると、小アジアの教会の人々がますます遠ざかるような思いにもなるのです。

しかし、果たして本当にそうなのでしょうか。「いろいろな試練」。試練とは何でしょうか。試されることです。何を試されるのか。信仰です。私たちがキリスト者として、教会にあって、信仰に生きる場所での試練です。信仰を試されることです。苦しいことや悲しいこと、苦難なんてあってほしくない。ない方がいい。それは、キリスト者である私たちにおいてもそうです。ただ、聖書が語る試練、信仰を試される、その「試み」というのは不思議なものです。試練、試みとはどこから来るのか。それを偶然のものだと、聖書は語らないのです。

「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが」。ペトロがそのように語る6節において、ギリシャ語の原文を見ると、そこに「デイ」という小さな言葉が出てきます。「悩まねばならない」。「…ねばならない」と日本語では訳される言葉です。そのことが必然的に起こる、起こらねばならないという意味合いを表す言葉です。特に、聖書においてこの言葉が出て来る時には、ある特別な意味合いを含んでいます。神の御計画、神の御意志、神の御心によるところだから、必ずそうならねばならないという意味なのです。

キリスト者としてこの世に生きる場所、苦難がある。それが信仰の試練となったりする。しかし、そのことが、ある意味で、必然的なこととして語られる。神の御計画、御意志、神の御心だから、必ずそうならねばならない。「いろいろな試練に悩まねばならない」。しかし、その時、そこに、神の御計画、御意志、神の御心が深く関わっている。つまり、そこに神の御手が深く関わっている試練として受け止められる時に、試練が、信仰を本物にしていく。そのためのよきものとして用いられていくのです。

ペトロ自身の歩みにも、いろいろな試練がありました。そのことによる挫折もありました。しかし、ペトロのためにも十字架に死んでくださった主イエスの愛と救いの恵みは、彼を立ち直らせ、最後まで信仰に生かしました。主イエスは、私たちを捉え、信仰を、信仰による喜びを、私たちの存在の奥深くに置き、決してなくならないよう祈ってくださいます。